

エネルギーを見る、 エネルギーをつくる

大阪ガス エネルギー・文化研究所 前所長 安達 純

Written by Jun Adachi

はじめに

エネルギーは、私たちの日々の生活に欠くことのできない必需品である。しかし、同じ必需品でも食糧などと比べると、意外と選択の幅が狭いのではないだろうか。

もちろんこれまでも、「エネルギー選択」がなかったわけではない。しかしそれは、例えば炊飯器や給湯器、暖房機などの中で、どのエネルギー消費機器を購入するかという行動を通じてのエネルギー選択であり、エネルギーそのものよりは、機器の機能や使い勝手の方にウエイトを置いた選択であったように思われる。しかしここに来て、そうした状況にも変化の兆しが見られる。

エネルギーの自由化

その一つは、エネルギー分野における規制緩和・自由化の動

きである。エネルギー供給は、これまで長い間、規制の下に置かれてきた。

生活必需品であるエネルギーは、常に安定的に供給されることが至上命題であったからである。そ

の一方で、価格の低減という要請も安定供給に劣らず高まってきた。エネルギー市場を開放して新規参入を促し、価格を引き下げることで、消費者の利益を増進しようというのが自由化の目的である。

電気やガス供給の自由化が一般家庭にも及ぶかどうかは、これからの議論ということになっているが、自由化されると、確かに消費者の選択の幅は広がる。既存のエネルギー事業者や新規参入事業者の中から、どのエネルギーをどこから購入するかは、消費者自らが判断し選択することになる。その場合、価格が何といつても最大のポイントになるであろうが、そればかりでなく、供給の安定性や保安・サービスのレベルなども判断材



料になるであろう。さらには、供給する事業者に対する信頼感や好感度、つまりブランド力なども消費者の選択に影響するかもしれない。このうち供給の安定性、保安・サービスなどは、「公益性」と呼ばれるものであるが、これらを自由市場に委ねてしまつてよいかどうかについては、自由化論議の中で大きな論点になっている。

それはともかく、以上のような自由化による選択肢の拡大は、エネルギーそのものの選択肢の拡大というよりも、その枠はあまり変わらずに、選択対象となる事業者の幅が拡大することになるのではないだろうか。何故なら、自由化における競争の決め手は、あくまでも価格であるからである。低価格であることが市場への参入条件である限り、新規の供給者は参入できても、新規のエネルギーはなかなか参入しにくい。

● 垂直方向への選択肢の拡大 ●

こうした自由化による選択肢の拡大を、イメージ的に、選択肢の「水平方向への拡大」と呼んでみることにしよう。これに対して、エネルギーそのものの選択の幅を拡げる、「垂直方向への拡大」という考え方もあるのではないだろうか。後者について少し考えてみたい。

「食へのこだわり」という言葉をよく耳にする。これは、かつては豪華、珍味、特別といったような意味で使われていたが、今はむしろ、健康に留意した素材を選んで、手間ひまかけて、さらに雰囲気味わいながら、というニュアンスでいわれることが多い。本誌六二号で「スローライフ」について取り上げたが、その一環である「スローフード」は、今風の「食へのこだわり」である。そして、このような「こだわり」、「スローなライフスタイル」はエネルギーの分野にも及びつつある。

本誌でもたびたび登場している当研究所研究主幹の濱は、まさに「エネルギーへのこだわり」を実践している一人である。築二七年の中古住宅を改修して、断熱性の改善、自然エネルギーの活用、自然素材の利用、不要建材の再利用、建物緑化などをふんだんに取り入れた環境共生住宅をつくり、さらに日々の暮らしの工夫も積み重ねた結果、エネルギー消費量は一般家庭の半分以下で済ませることができた。

そうした濱の口癖は、「二次エネルギーで考えよう」である。ふだん私たちが家庭で使っているのは、電気、ガス、灯油、ガソリンなどであるが、これは石油や天然ガス、原子力などを加工（利用）してつくられたものである。後者が一次エネルギー、と呼ばれる。そこで、「一次エネルギーで考える」とは、素材に戻って考えること、つまりエネルギーの素性を問うということである。それを前提にすると、環境負荷を抑えるためには、太陽光や太陽熱などの再生可能エネルギーがまず選択されるのが望ましく、そして化石燃料の中では、二酸化炭素排出量の比較的少ない一次エネルギーを素材としてつくられたものが優先されるべきだという考え方になる。



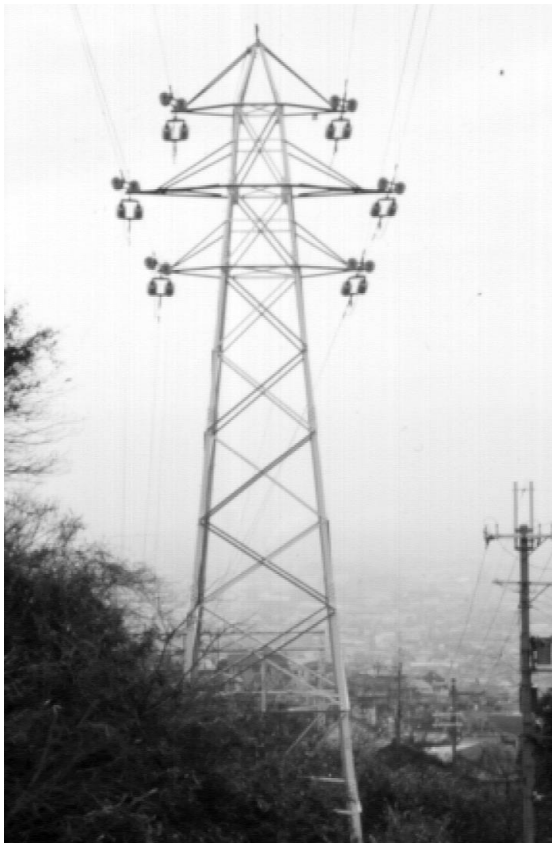
エネルギーを見る

ところで、エネルギー選択といった時、無駄なエネルギーを使わない、つまり節約も大きな選択肢の一つのはずである。しかし、頭の中では節約、省エネは大切であると分かっているながら実行はなかなか難しい、というのが実情ではないだろうか。それは何故か。いろいろと理由はあるだろうが、「エネルギーは目に見えない」からではないか、と私は少し変わった仮説を持っている。

かつて私たちは、実際にエネルギーをこの目で見たり触れたりして生活していた。自身の記憶を辿ってみても、家で煉炭をおこしてこたつに入れ、暖をとった覚えがある。そして薪をくべ、五右衛門風呂を沸かす手伝いをしたこともある。今から半世紀も経たない昔、山奥でも何でもない、ごく普通の市街地での生活の一コマである。当時は、暖をとり、風呂に入るのも一苦勞であった。やがて生活全般が便利になり、スイッチを入れコックをひねるだけで電気やガスをふんだんに使えるようになった。その一方で、便利になればなるほど、エネルギーはこの目では捉えられず、意識に上らない存在になっていった。便利さとは、生活の煩わしさから解放されることである

が、さらに進んで、生活のプロセスを意識しないで済むということも意味していたのである。

今さら昔の生活に戻れと



いいたいのではない。そうではなく、「エネルギーを見る」ことの重要性を、地球環境問題の観点から、もう一度再認識する必要があるのではないだろうか。プリウスという車にはエネルギー・モニターが取り付けられていて、運転の仕方によって変化するエネルギーの使用状況が一目で分かるようになっていて、このエネルギー・モニターを眺めていると、不思議なことに、省エネルギー運転をしようという気になる。また、家庭で環境家計簿をつけると、実績データを通して「エネルギーやゴミを見る」ことで、無駄を省かなければという気持ちが湧いてくる。考えてみると、先ほどの「一次エネルギーで考える」ことも、実は「エネルギーを見る」と深く関係がある。私たちが日常使っているエネルギーを外側から見ても、それが何からつくられているかは分からない。見ようとしなければ、見えてこないのである。

今後は、エネルギーをよく見ることから、さらに一歩進んで、太陽光や太陽熱などを利用して、自ら「エネルギーをつくる」ことを選択する消費者も増えていくであろう。水平方向ばかりではなく垂直方向にもエネルギー選択の幅は拡大していくに違いない。

エネルギーを供給する事業者としても、できるだけ価格を下げる取り組みとともに、エネルギーの素性や製造されるプロセスをも含めて外から見えるようにし、さらに消費者自らがエネルギーを生産することを後押しするような姿勢が、今後求められていくものと思われる。